青年と今日[[1]](#footnote-1)

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　香山光郎

青年のない時代はない。しかし青年の任務は時代によつて變る。即ち平和な時には、青年は、次の代の繼承者として、先輩を見習いつ、力を養へば足りる。かゝる時代の青年の誇は野心と享樂である。將來の英雄を夢み、富豪を夢みる。現在の責任者ではないからである。彼は多少個人主義的になつても、退嬰主義的になつても、社會はさして咎めようとはしない。青年血氣の時のありがちの過ちとして大目に見られ、むしろ可愛いくさへ思はれる。そのかはり、かゝる時代には、青年の存在は多くの場合、無視され、輕んぜられ、うるさがられる。

しかし、今日の如き非常時、戰時になると青年は、舞臺の眞正面に立たされて、脚光を浴びるやうになる。彼は、國家の運命を雙肩に擔う、當面の責任者となるからである。彼はもはや次の時代の繼承者として、先輩を見習いつ安閒として力を養つてゐることを許されない。彼は、机の上で、生涯の野心と青春の享樂を誇りつゝ、將來の富貴功名を夢みることを許されない。かれは、現在の責任者となるのである。彼は、もはや個人主義者でなくして、一致團結、命令の下に動くべき兵士なのである。殊に、大東亞戰爭の今日の如く、總力戰に於いてさうなのである。

諸君は、青年である。敏感にして聰明なる青年である。諸君は必らずや、國家のこの時代の、諸君青年に對する切なる要請を、ひしひしと、しみじみと感ぜられることであらう。この決戰段階に於ける、國家の諸君への期待は誠に切實そのものであつて、諸君に取つては、實にのつぴきならぬ上命令である。それは、身を推して總蹶起せよといふ命令だ。諸君は、この國家の要請に答ふべく、この時代に、この國土に於いて生を受けられたのである。今や帝國の命運は、讀んで字のごとく諸君の雙肩にかゝつてゐるのだ。これは誇張のことばでもなく、激勵のためのことばでもない。諸君自身必らず、はつきりとそれを感ずるであらう。

青年は、何時の時代にもあつた。しかし、諸君が處するごとき時代に、諸君が擔へるごとき重き責任を負うた青年は、余の歴史の智識の及ぶ限りでは、かつてなかつた。諸君は、歴史あつて以來の、最大責任を負うた青年たちである。もしも、諸君の中で一人でも、これを感じてゐないものがあるならば、その人は大いに迷つてゐるものといはねばならぬ。それは恰かも自分が花聟として、婚禮の席にありながら、自分が花聟たるを忘れたよりも甚しい迷である。

今や世界中の青年たちは、各々その祖國の運命を擔つて戰つてゐる。盟邦ドイツには、第二戰線で、敵軍を迎へて、新しい死闘を始めた。敵米英の青年にしたつて、同様だ。彼等も家庭を離れ、學業を離れ、あらゆる個人的慾望や、青春の野心や享樂を棄てゝ、或は血をもつて、或は汗をもつて、各自の祖國を護るべく、現にこの瞬間に於いても戰つてゐる。いな死につゝあるのである。

しかし、諸君。他の國の青年たちの使命とわが日本の青年たちの使命との間には、その質に於いて價値に於いて、天壌の差があるのだ。敵米英の青年たちは、あたら貴き血を、汗を、その生命を滅び去りつゝある、慾の世界、惡の世界のために濺ぎつあるのだ。彼等の前途には勝利もなく、光榮もないのだ。天命に見棄てられた彼等の祖國である。數百年、その帝國主義、資本主義によつて人類を毒し、殊にアジヤ十數億の民生を塗炭に苦しめて、その罪惡今やうやく充足りて、永遠に葬り去られつゝあるのである。ルーズベルトや、チヤーチルの徒は、實に過去[の]惡の最後の指導者であるのだ。かれら、敵米英の青年たちの汗や血は、實に悪魔の亡骸を葬るべく流されつゝあるのだ。何とあはれなものであらう。

翻つて、わが日本の戰爭目的を見よ、その動機を見よ。米英の惡魔主義によつて蹂躙されたアジヤ十億の民を救ひ、アジヤの精神的傅統に基づいて、道義的平和世界を建てんための戰爭こそわが大東亞戰である。われ勝てば、十億生き、われ破れゝば十億亡ぶ。われ勝てば、道義勝ち、われ破れゝば地球は惡の世界となる。われ勝てば、天勝ち神々勝ち、佛菩薩たち勝ちたまふ。いな、われ勝つて始めて、敵米英二億の民族も、天の道による人間らしき生活の仕合を味はひこの地球に平和は訪るゝであらう。かゝる故に天命われにあり、かゝるが故に必勝の信念われにあるのである。われわれは天皇[の]み民であり、八紘爲宇の實現の聖業の翼賛者であるからである。

しかし、青年諸君。天は汗にのみ取入をもつて報い、血にのみ勝利をもつて報いたまふ。わが勝利、わが皇道の宣揚は、專らわが國民の汗や血を價として贖はるゝ天の賜物であることを忘れてはならない。

支那事變以來、わが皇軍勇士の汗と血は、赫々たる、數へ切れないほどの大戰果を齎らした。現在も、兵士は前線に於いて、産業戰士や農民は銃後に於いて、貴い血を汗を流しつゝある。これらの汗や血は、一滴といへども無駄になることはないであらう。それが積りに積つて、最後の大勝利となり、大東亞共榮圏となり、皇道の全世界への宣揚とはなるのである。兵士は誰か。産業戰士は誰か。他にあらず、諸君青年である。

諸君、今や、この大戰爭の、最後の決勝期は刻々と近づきゝある。東條首相はいはれた、帝國は隱忍、力を貯へて來た。今や敵の戰意を根柢から破碎すべき時機を覘つてゐるのだと。總理大臣のことばに嘘はない。飛行機も隨分溜まつた。數萬人の學兵操縦者が使用すべき飛行機が、一斉に前線に飛び出すことを想像するがよい。太平洋上に於いて、眼醒ましきわが大[攻]勢の幕が切つて落される、日を想像するがよい。その日は目睫に迫つて居る。今日か明日かだ。

しかし、諸君。敵だつて存亡を賭しての戰ひだ。日本に時を貸すなとか、時は日本に與すとかで、彼等も焦り出した。彼等は物量のありつたけ、血の量のありつたけを傾け盡くしてかゝつて來るであらう。太平洋戰線といひ、印緬戰線といひ、歐洲第二戰線といひ彼等は今や死物狂だ。血眼だ。決して輕んずべき敵でないこといふまでもない。敵の飛行機がわが本土を爆撃することもあらう。空襲必至とさへいはれてゐるではないか。京城が爆撃される日も、何時來るか分りはしない。最近盛に防空演習をやつてゐるが、それは決して物見遊山ではない。眞劍なのだ。銃劍術をやつてゐる。どの落下傘部隊來らば來れだ。戰爭の様相が深刻苛烈になればなるほど、最後の段階に近づけば近づくほど、力一杯の仕事となる。相撲を見よ、拳闘を見よ。最後の瞬問に少し力のあまつた方が勝つではないか。頑張りの強い方が勝つではないか。勝敗の要は最後の瞬間の力の出しやうにあるのだ。

青年諸君。今こそ。わが國民に取つて、最後の力の出す時だ。それだから、諸君が、今日こゝに呼ばれたのだ。諸君は、京城府によつて呼ばれたと思つてはならない。國家によつて呼ばれたのだ。國民が最後の大力を出すやうに、國民の總蹶起を推進せしむべく、諸君は擇ばれたのである。

諸君は、現在各々その職域に於いて、汗の奉仕をして居られる。それだけでも大變な苦勞だ。また諸君は、何時なんどき、如何なる戰闘任務に召されるか分らない。諸君は、常に待機の狀態にある。常在戰場といふものだ。汗も血も、青年のものであつてこそ、始めて力があるのだから。

しかるに、諸君は、上述の重い任務の他に今一つの任務を負ふべく、要請されてゐるのだ。それは、諸君が、他の同胞の推進力たれといふことである。一億國民の蹶起し足りないところを鞭つて總蹶起をさせ、力の出し足りないところをもつともつと出させるやうにせよといふのが、推進隊として擇ばれた諸君の任務だと信ずる。

諸君は、どう思ふ。諸君の家庭は總蹶起してゐるか。決戰國民の家庭として、足りないところはないか。まだ出してゐない金屬はないか。まだ貯金してゐない現金はないか。精神的の緩みはないか。諸君の部落はどうか。老いは、若きは、青年は、婦人は、どうか。これで決戰國民として、申分なしと思はれるか。道徳や、精神の點に於いて、よく如何なる苦難にも喜んで耐へ忍び、またよく大東亞諸民族の指導者となるだけの徳を、度胸を、大らかな襟度を十分に備へていると思ふかどうか。デマは飛ばぬか。諸君。諸君自身はどうか。今の分で、決戰段階の大國民として申分ないと思ふかどうか。もつと節約してもつと貯蓄も出來るのではなからうか。貯蓄のみが、戰費を賄ひ悪性インフレを防止するのだ。何が何でも、今年朝鮮で十八億圓、京城府だけで四億圓の貯蓄をしないことには、戰時財政に故障が生ずる。物の隱匿横流、從つて起る物資不足と惡性インフレの根源たる闇取引はどうか。諸君の部落民の愛國心はどうか。敵愾心はどうか、兵役や徴用に對する態度はどうか、國策に順應する心構はどうか。これらの諸點について、すべて滿點であるならば、特に諸君を煩は[さ]ずともすむ。もし、これらの諸點について、到らないところがあるならば、（余は大いにありと認める）、それらの故障（しかり故障だ、戰爭遂行を妨げる力であるから）を取り除くことが諸君の任務である。これこそ戰力増強であるからだ。

諸君。諸君の家庭に一片の眞鍮や不要の金屬を殘してはならない。諸君の家庭に闇取引が行はれてはならない。諸君の家庭に、戰爭のために生ずるところの、生活の窮屈さに對して、一言の不平の聲も起つてはならない。諸君は國家の命令や要請に對して、一刻の逡巡もあつてはならない。諸君に召集や徴用令狀が降りた場合諸君は勇躍それに應ぜねばならない。一人といへども、意氣地無きざまを見せてはならない。諸君の母や妻たちもである。諸君の部落は、總親和一致團結、一家をなさねばならない。そして、如何なる事態が發生しても、あわてず騒がず、慰めあひ助けあつて。一絲亂れず團體行動を取らなくてはならない。諸君が起ちあがつて、この仕事をすべき、任務を負ふべく、諸君は、勇躍、熱誠をもつて、こゝに結束し、誓約したのである。

諸君、諸君は歸つて、諸君の部落の青年中に同志を求めよ。五人でも十人でもよい。滅私奉公の精神に燃ゆる青年はあるはづである。いな、諸君自身の滅私奉公の精神と實踐とは必らずや他の青年を感動させて、滅私奉公化するであらう。一人あれば大勢を生む[。]諸君よ、その一人になれといふのだ。一人が中心となり、五人、十人と引入れて二十人三十人となり、それらががつちりと組んで、絶えず、休まず、飽まずに、諸君の部落を、決戰國民の部落、即ち完全なる皇民郷たらしめむために努力するのである。何故にこの任務が、特に青年に負はされるのか。青年は利慾に染まらない、純眞なる情熱の所有者だからである。青年のみよく淨き魂の力を發揮して己を犠牲にすることが出來るからである。（諸君は命令者であつてはならない。諸君は部落民の僕となり、仕へるものとなることによつて、部落民の信頼と敬愛とを得る。信頼と敬愛を得れば、諸君は已に部落の指導者になつたのだ。民衆は己のために仕へるものに仕へたがるものである。）民衆は決して、私利私慾を蔵するものに從はない。民衆は唯己なきものを敬ふのである。であるが故に、諸君が、諸君の同胞を指導しようとならば、諸君の私慾を棄てねばならない。限りなく民衆を愛し、限りなく民衆に與へるものになれ。諸君は私慾を棄てることが難かしいといふのか。諸君よ、この席で戰死したまへ。實際諸君年輩の青年が何萬何十萬と戰死してゐるではないか。玉碎してゐるではないか。諸君よ、この座で戰死したまへ。そして、戰死したつもりで、諸君の同胞のために働きたまへ、そしたら、必らず諸君は民衆に親まれ、信頼される。諸君の一言に民衆は喜んで從ふであらう。假に敵の爆撃のあつた場合、澤山の避難民が路頭に迷ふ場合にも、諸君の一言が、彼等の恐怖の心を打鎭めるあらう。まして平常時に於いてをやである。金屬を出しませうと、諸君がいへば民衆は出す。諸君を愛し信頼するが故に。家や町をきれいにしませうといへば、きれいにする。皇民郷はきたなくあつてはならない。諸君が先頭に立つて行けば、民衆は喜んでついて來る。火の中、水の中へでもついて來る。諸君は私慾を離れたからである。そして、その行先は、戰爭の勝利であり、民衆やその子孫等の永遠の幸福なのだから。諸君。青年のないところはない。どこの部落にも青年はある。朝鮮だけでいふならば、二千五百面、二萬五千部落、部落ごとに青年はある。その青年たちが、皆諸君のやうに起ちあがつて、推進力となるならば、今より何層倍の力を出すことだらう。半島二千五百萬が、十分力を出すと出さぬとは、戰爭の勝敗に大いなる關係をもつ。半島が十分の力を出したが故に戰爭に易々と勝つたとなれば、半島の光榮これに過ぐるものはないではないか。それに反して、この國運を賭しての大決戰に際して、半島が十分の力を出さなかつたとあつては、誠に申譯ないことであり、引いては、半島に籍を置く三千萬民の將來にも影響がないとはいへない。出し得る力を出さずして、何の面目あつてか、勝利の光榮を分たう。大東亞の本舞臺に堂々たる指導者として立つべきはえある身分でありながら、赤面して、片隅にちゞこまつてゐなければならない運命に遭ふかも知れない。さうなればそれは、帝國の国力の減殺を意味すること勿論であるが、同時に朝鮮同胞として、取返しのつかない痛恨事となることであらう。

諸君、思をこゝに致せば、諸君の責任のますます重きを感ずることゝ信ずる。諸君、半島を完全なる皇民郷里（きれいで道義的な）とし、半島同胞を、純忠無垢なる皇民にして天皇にさしあげることこそ、最も大いなる報恩の行ではなからうか。そして、半島民衆の子孫がいや榮えに榮えて内地同胞と何等かはることなく、その同祖同血、同魂性を發揮して、皇道の宣揚の聖業に、末長く末廣く翼賛したてまつる、福祉を得るといなとが、諸君青年の出やう如何によると余は信ずるものである。

諸君、諸君は、このことが可能だと信ずるか。もし、信ずるなら、大聲張上げて、「必らずやる」と叫んで[く]れ。

1. 『新時代』1944年8月号 [↑](#footnote-ref-1)